
右のポッケは私のもの

葉月 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右のポツケは私のもの

【Nコード】

N0692P

【作者名】

葉月 奏

【あらすじ】

高校で出会った二人は

偶然にも偶然が重なり、

同じクラスになったり席がトナリになったり

合宿の班がいつしよになったりしているうちにお互いに心惹かれあ
ってゆく。

そして付き合い始めた二人。

はじめは、まわりが羨むほどのカップルだったが

だんだんすれ違いが生じはじめ、愛香は翔太の浮気現場を目撃して

しまう。

そこで愛香がとった行動とは？

出会い

今年もやってきた。寒い冬が。人のぬくもりを感じられる季節が…

「寒い。ねえ、ねえつてば。」

「ん？寒いことなんていちいち言わなくてもわかってるよ。」

「なんか翔太最近冷たいよ？」

「そうか？愛香がそう思ってるだけだろ？いつも思い込みだけは激しいからなあ。」

「ちよつとお！思い込みだけつてなによお！」

「はいはい。わかったわかった。別に怒ってねーよ。しかし今日は一段と寒い。」

「ほら。あ、さっきの言葉そのまま返してあげるよ。『んなこといちいち言わなくて

もわかってるよ。』って。」

「そのままじゃねーし。とにかく寒い。カイロ貸してッ。」

「もうッしょうがないなあ。ハイ。」

「おう。さんきう。」

いつもこんな会話をしながら駅までいっしょに帰ってた。私たちは高校で出会ったから

いっしょに帰れるのは中央坂の駅までなの。本当はもっといっしょにいたいのに…………

・二年前・

私たちは同じクラスになった。偶然にも偶然が重なって席もトナリになった。最初は、

全然何も思わなかったのに、一年の時、勉強合宿で自由時間の班がいっしょになって、初

めてお互いのことをよく知った。それから、同じ歌手が好きなこともわかり、意気投合し

た私たちはそのまま何事もなく、秋を迎えた。でも、気になって気になってしかたがなか

った。こつちを向いてほしい。お願い。一度でもいいから…。あ、目が合った。すごく嬉

しい。あれ、こんな気持ち…なんて言うんだっけ。

このとき、初めて気づいた。私が翔太のことを好きなんだって。でも、ふられたらどう

しよう。不安な日々が続いた。でも、9月10日、翔太が駅にいた。

「あれれ？…どうしたの？いつもなら帰ってるのに。友達でも待ってるの？」

「いや。花櫛さんを待ってた。」

「え…。私？」

「うん。ちよつと話したいことがあるから、家の近くまで送っていつてあげるよ。」

「え、あ、うん。ありがとう。」

そして電車が来た。

「あの…話って…？」

もしかして…？

「ああ。あのさあ、俺…花櫛さんのこと…好きなんだけど。」

「え…。」

数秒間私の中で時が止まった。

「やっぱ困るよな。いきなり、好きだなんて言われても…。」

「そんなことないよ！」

車内の乗客が一斉に私のほうを向く。

「ご、ごめん。私もね、蔵持くんのこと、好きなんよ…。」

「え…！ほんとに？」

「嘘つかないよッ。」

「え、じゃあ付き合って…？」

「いいに決まってるじゃん。」

「夢みたい。」

「ほっぺつねってあげよか？」

「やめて。」

こうして、私たちは付き合い始めた。

帰りは絶対いっしょに駅まで帰った。駅からは別々の電車に乗る。

はじめは、時々触れる左手を気にして歩いてた。

今では翔太の右のポッケのなかに私の手はある。

すれ違っていく二人

出会ってから2年が経った。今週の月曜日は二人の記念日だった。いつもは寄り道なんかしないで帰るけど、その日だけは特別だった。去年から、記念日にはすこしデートして、その週の日曜日には一日中ずっと一緒に

いる。今日は1週間経って日曜日です。

待ち合わせの時間の10分前についた私。いつも翔太は早いから今日こそは

わたしが先に行って待っててやろうと思って。だけど翔太は30分経っても、1時間経っても来なかった。

なにかあったのかな？そう思って翔太に連絡してもでてくれない。不安が私のなかでよぎった。

でも、これ以上待つてられないからもう帰ろう…。メールだけ打って…。

『翔太へ

今どこにいるの？もう1時間も待つてるし、寒くなってきたからもう帰るね…。』

私は駅へ向かった。

そうだ！一人のほうが買い物しやすいからちよつと買い物に行こうかな。

駅の近くにある商店街を一人で歩く。

あれ？なんか見たことある人が向こうから歩いてくる。誰だろう？

あ！美奈だ。美奈は私の幼馴染で小さいころからの親友だ。

美奈の隣には見知らぬ外国人男性がいた。

邪魔しちゃ悪いから声かけないでそつとしておこう。

そう思った。すると

「あー！愛香じゃん。一人？」

「あ…うん。ちょっと事情があつてね。」

「え…大丈夫？」

「うん。全然大丈夫だよ。それより…？」

「ああ！そういえば紹介してなかったよね。ウチのダーリン。マイクよ。」

「ハジメマシテ。ワタシハマイクとイイマス。」

「Oh, I'm a i k a . I c a n s p e a k E n g l i s h a l l i t t l e . N i c e t o m e e t y o u .」

「Oh, really? Nice to meet you too.」

「そつか愛香も英語喋れるんだよね。」

「一緒に英語習つてたじゃん。忘れちゃったの？ 笑」

「覚えてるよ 笑」

「じゃあ、邪魔しちゃ悪いから。またね」

「うん。バイバイ」

美奈とマイクと別れてから少し歩いていた。

あれ？また私、前から来る人知ってる。でもなんだか嫌な予感がするのなぜだろう？

え…？翔太？わかんない。人が多すぎて。私とうとう幻覚見えてるのかな？

…いや違う。翔太だ。一人なの？…違う一人じゃない。女の人がいる。

嘘でしょう？でも右のポケットには翔太の手だけじゃない。その女の人の手も…。

嫌よ。私は信じたくない。でも、私の目は近づいてくる人は翔太だと明らかにしている。

「翔…太？」

わたしは知らぬ間に言葉を発していた。

「愛香？」

翔太にも聞こえてみたい。

「ねえ翔ちゃん。この人だあれ？」

女の人は言う。

「おまえには関係ない人だよ。」

「あなた誰？」わたしは思い切って聞いてみた。

「あなたこそ。翔ちゃんの何？」

「私は、翔太の……」

「こいつはただの幼馴染だよ。」

はあ？ふざけないでよ。そう言っただけだった。

でもそう言う前に翔太とその女の人は行ってしまった。

もう……意味わかんないよ。あの人はだれ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0692p/>

右のポッケは私のもの

2011年1月25日01時58分発行